

## 04-3 オーストリア共和国の子育て予備軍における 子どもの発達の問題の気づきについて

○伊藤 凌太郎 (OT)

神戸大学大学院 保健学研究科 リハビリテーション科学領域

Key word : 発達障害, 親, 支援

【はじめに】3歳児健診などのスクリーニングの整備が充実しているにもかかわらず、漏れや、適切な支援を受けていない子どもの存在も指摘されている<sup>1)</sup>。この原因はいくつも考えられるが、その一つに親が子どもの発達の遅れや問題に気づけていない可能性がある。親の気づきの時期、父母における差の報告<sup>2)</sup>などはあるが、親が子どもの発達の問題に気づけるかといった報告はない。そこで「大人が子どもの発達の問題に気づけるのか」に焦点をあて、研究を開始した。今回はオーストリアでの調査結果を報告する。

【目的】大人が子どもの発達の問題にどの程度気づけるかを明らかにする。発達に関連する教育の影響も検討する。

### 【方法】

〈対象〉育児経験のない学生を対象とし、自閉症スペクトラム障害(以下、ASD)と注意欠陥・多動性障害(以下、ADHD)の知識の有無によって2群に分けた。両方の障害の知識がある方を学習群、片方のみあるいはどちらの知識もない方を非学習群とした。

〈実施方法〉1人の子どもが生活している様子の3つの映像(それぞれ約2分間、音声なし)を対象者が見て、気になったことなどを質問紙に記入した。映像の子どもは日本人の4~5歳で、ASD1名(以下、映像A)、ADHD1名(以下、映像B)、診断なし(障害の疑いはあり児童発達支援施設に通所している)1名(以下、映像C)である。映像は親の許可を得て、筆者が撮影・編集した。本研究は筆者が所属する機関の倫理委員会の承認を得て、対象者には研究参加と発表について書面で同意を得ている。

〈分析方法〉発達障害領域の教育に携わる作業療法士3名全員が一致して「問題」と指摘した部分を正答とした。各映像には6~7個の正答を設定し、正答率を算出した。学習群と非学習群の障害別の正答率を2標本t検定で比較した。統計分析ソフトR(ver. 3.4.4)

を用いた。

【結果】対象はオーストリアの大学生105名(平均年齢 $21 \pm 3$ 歳、女性100名・男性5名)、学習群50名、非学習群55名で、映像A・映像B・3つの映像の合計の3項目は、学習群の正答率が有意に高かった( $p < 0.01$ )。診断のない子どもの映像では有意な差はなかった。学習群では、映像A、Cに比べ映像Bでは有意に正答率が高かった( $p < 0.01$ )。また映像AとCの間に有意差はなかった。非学習群では、映像A、Cに比べて映像Bでは有意に高く( $p < 0.01$ )、映像Aに比べて映像Cが有意に高かった( $p < 0.05$ )。

【考察】知識があっても障害特徴により気づきに差があったが、ASDはコミュニケーションに問題を持つこともあるので、多動や衝動性などのADHDの特徴に比べ、短時間の映像を見るのみでは気づきにくいことが考えられた。非学習群でも、ADHDに比べASDが気づかれにくかったが、これも同様の理由が考えられるため、長時間の観察での気づきの有無の確認が必要である。

知識の有無にかかわらず、診断がついていない子どもを気づきにくいことは、障害特徴が明確でなく、知識がない場合も、知識がある場合も両方気づきにくいのではないかと考えた。

障害によって気づかれやすさに差があるかどうかを明らかにするため、提示映像条件も含めてさらに検討が必要である。

### 【文献】

- 1) 笹森洋樹ら：発達障害のある子どもへの早期発見・早期支援の現状と課題、国立特別支援教育総合研究所研究紀要37巻：3-15, 2010.
- 2) 山岡祥子ら：高機能広汎性発達障害児・者をもつ親の気づきと障害認識—父と母との相違—、特殊教育学研究46(2)：93-101, 2008.